

## 列王記第二 19 章 14 – 19 節 「必死の祈り」

### 1 A アッシリヤ王の脅し

### 2 A ヒゼキヤの主への応答

#### 1 B 手紙の開示

#### 2 B 祈り

#### 1 C 神の真理

#### 2 C 事の実

#### 3 C 神の救い

#### 3 B 他の拠り所

### 3 A 主の回答

#### 1 B 受領

#### 2 B 救い

## 本文

列王記第二 19 章 14-19 節を開いてください。午後は 19 章から 21 章までを学んでみたいと思います。

14 ヒゼキヤは、使者の手からその手紙を受け取り、それを読み、【主】の宮に上って行って、それを【主】の前に広げた。15 ヒゼキヤは【主】の前で祈って言った。「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神、【主】よ。ただ、あなただけが、地のすべての王国の神です。あなたが天と地を造られました。16 【主】よ。御耳を傾けて聞いてください。【主】よ。御目を開いてご覧ください。生ける神をそしるために言ってよこしたセナケリブのことばを聞いてください。17 【主】よ。アッシリヤの王たちが、国々と、その国土とを廃墟としたのは事実です。18 彼らはその神々を火に投げ込みました。それらは神ではなく、人の手の細工、木や石にすぎなかったので、滅ぼすことができたのです。19 私たちの神、【主】よ。どうか今、私たちを彼の手から救ってください。そうすれば、地のすべての王国は、【主】よ、あなただけが神であることを知りましょう。」

私たちの学びは、ヒゼキヤの生涯に入っています。王国が分裂してから、南ユダで初めて高き所を取り壊した、主のみ仕える王が現れました。しかしこの王に、いやこの王だからこそ、ユダの歴史の中で最大の危機を迎えます。アッシリヤ帝国という拡張と膨張を続ける恐ろしい国に、ユダの町々をことごとく攻め取られ、今やエルサレムだけになり、そこが包囲されている状態です。

アッシリヤの王セナケリブによって送られたラブ・シャケがエルサレムの住民を脅し、降伏するよう強く促しました。三人の王の側近は王宮に戻り、ヒゼキヤに報告します。そしてヒゼキヤはイザヤにこのことを報告、イザヤは預

言をしました。アッシリアの王を恐れるな、彼は一つの知らせを聞いて引き返す。さらに、自分の国の戻り、そこでわたしは彼を剣で殺す、と主は語られました。確かにこのことが起きました。エチオピアの王が攻めに来ているという知らせが来てセナケリブは、引き返します。これで、ことごとく脅しの言葉の矢によって痛めつけられたヒゼキヤは一息つけるかな、と思ったのですが、セナケリブがその傷ついた心に決定的な脅しの手紙をよこしてきました。今、読んだところは、その手紙を読んだ後にあまりにも苦しくて、主の宮に行って祈りを捧げたヒゼキヤの祈りでした。

今朝は、「必死の祈り」について学びたいと思います。私たちの生活は、ストレスと心理的圧迫の中にあります。普段は自分がそれに耐えることができるよう調整し、ストレスと共に生活しているのですが、その状況がもはや自分が対処するにはお手上げ状態であり、自分を超えた存在に届かなければいけない時がありますね。

私はこのヒゼキヤの祈りを共に祈ったことがあります。ある人の深刻な状況を聞き、あまりにも状況が似ていました。ある人によってビジネスが奪い取られ、おまけにマスコミには悪く書き立てられ、ついに、おそらくは本人から脅しの手紙がきたのです。相手が熱心なクリスチャンであることを知っているのに、聖書の言葉を使って、いかにクリスチャンとしていかに酷いことをしているのか、ということを書き立てる内容でした。すっかり貶められたその方に、私はこのヒゼキヤの祈りを思い起こさせて、手紙を主の前に広げて、共に祈ったことを思い出します。

## **1 A アッシリア王の脅し**

アッシリア王の手紙は、10-13 節に書いてあります。「ユダの王ヒゼキヤにこう伝えよ。『おまえの信頼するおまえの神にごまかされるな。おまえは、エルサレムはアッシリアの王の手に渡されないと知っている。おまえは、アッシリアの王たちがすべての国々にしたこと、それらを絶滅させたことを聞いている。それでも、おまえは救い出されるというのか。私の先祖たちはゴザン、ハラシ、レツエフ、および、テラサルにいたエデンの人々を滅ぼしたが、その国々の神々は彼らを救い出したのか。ハマテの王、アルパデの王、セファルワイムの町の王、また、ヘナヤイワの王は、どこにいるか。』」

アッシリア王の促しは、「おまえの信頼するおまえの神にごまかされるな」であります。彼は、エルサレムの住民に対しては、「ヒゼキヤにごまかされるな」と言いましたが、ヒゼキヤ本人には、「お前の神にごまかされるな」と言いました。この前も話したように、当時の戦争はみな宗教戦争でした。国と国の戦いは、各国の代表する神々の戦いでした。ある国が勝つと、敗れた国の神々の像を持ち帰り、自分の国の神の宮に安置したりします。かつて、ペリシテ人がダゴンの神の宮に、イスラエル人から奪い取った神の箱を安置したように、です。

そして前回の学びにおいて、アッシリアがどれほど強く、恐ろしい民であったかを知りました。ユダの国では到底打ち勝つことができそうもない強い国々にさえ、アッシリアは勝利を収めていました。そして征服した民に残酷な仕打ちをしていきました。ユダの町々は事実、アッシリアの手に陥落しています。自分の民が、串刺しになり殺され、皮を生きたまま剥がされ、捕え移される時は裸のまま移され、下唇に釣り針を刺され引っ張られて

いきました。今のイスラム原理主義過激派も青ざめるようなテロリズムであります。

先ほど、私が共に祈った方が、クリスチャンとして何と酷いことをしているのか？という責め立てる手紙を受け取った話に戻りますが、自分の主に対する献身や奉仕を責め立てられることほどつらいことはありません。自分の欠点に見えるような部分を針小棒大に取り上げて、クリスチャンとして失格であるかのように言われるのは、単に自分の欠点が責められるよりもはるかに辛いことです。なぜなら、本質的には、その告発はその人に対するものであること以上に、キリストご自身に対するものだからです。

ヒゼキヤがそしられたのは、まさにそのことでした。「お前の信頼する神にごまかされるな」と言っているのは、「あなたはクリスチャンと言っているけれども、こんなひどい状況になっているではないですか。クリスチャンにもとります。」と言われているのと同じです。クリスチャンとて完璧ではないですから、その欠点に見えることをあげつらわれると、「自分はキリストに拠り頼み、キリストに仕え、キリストに従うことはできない。」と自分を責めるのです。これが、敵の思う壺であり、敵はキリストなしに私たちが滅ぶことを願っています。このような圧迫を受けている時、実は、責められているのは自分ではなく、キリストご自身であることに気づいてください。ですから、主がその人を必ず責められます。

## **2 A ヒゼキヤの主への応答**

### **1 B 手紙の開示**

ヒゼキヤは、今、どこに行ったでしょうか？セナケリブに返信の手紙を書きましたか？いいえ、主の宮に行きました。これは大事ですね、天使長ミカエルは悪魔と戦った時に、「主があなたを責めてくださるように。（ユダ 9 参照）」と言いました。自分独りで反論せず、主にあって悪魔に返答しました。主にあって強められ、主にあって悪魔に対峙したのです。

そして大事なのは、「あなたが手紙を読んでください」と言わんばかりに、その手紙を広げました。まるで、最も親しい友人に自分の苦しみを明かすために手紙を広げるかのようです。そして、その毒矢のような一字一句を読んでもらうように、広げたのです。つまり、自分の中に溜めるのではなく、主に思い煩いを知っていただいたのです。思い煩いというのは、実に非生産的なことです。イエス様は、「あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。（マタイ 6:27）」と言われましたが、心配によって生み出されるものは何一つありません。

けれども、ピリピ 4 章 6-7 節にすばらしい約束があります。「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。（ピリピ 4:6-7）」ここで、「あらゆるばあいに」というのが大事です。主が私たちに個人的に関わっていてくださっています。どんな些細に思われることでも、主は関心を持っておられます。ところが私たちは、大事なことだけ主に持っていかな

ければ、主に申し訳ない、おごがましいと思ってしまうのです。

そうになっている時に、私たちはこの方がキリストにあって私たちの父になっていることを忘れていきます。主は、私たちの髪の毛の数さえ知っておられる方です。詩篇の著者は、こう言いました。「神よ。あなたの御思いを知るのはなんとむずかしいことでしょう。その総計は、なんと多いことでしょう。それを数えようとしても、それは砂よりも数多いのです。私が目ざめるとき、私はなおも、あなたとともにいます。（詩篇 139:17-18）」砂よりも多い思いを私たちに対して抱いておられるのです。それでも願わないので、思い煩いはそのまま思い煩いで残ってしまいます。ヤコブは、祈りが聞かれない理由をこう言いました。「あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。（ヤコブ 4:2）」非常に単純です、実は主に対して願ってさえもいませんでした。

けれども、主に願い事を知っていただくと、驚くべきことが起こります。「すべての考えにまさる神の平安が、私の心と思いを、キリスト・イエスにあって守ってくれる」ということです。自分の理解では、到底平安など持てる状況ではありません。けれども、なぜか持てるのです。自分の考えを超えるところの神の平安です。

## 2 B 祈り

### 1 C 神の真理

ヒゼキヤの祈りに注目してみましょう。彼が初めに行ったことは、主への礼拝でした。「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神、【主】よ。ただ、あなただけが、地のすべての王国の神です。あなたが天と地を造られました。」自分の問題を話す前に、ヒゼキヤは主がどのような方であるかを自分の言葉で表現して、この方をあがめたのです。これはとても大切なプロセス、過程です。なぜなら、私たちは自分の限界を主に押し付けるからです。自分には限界があるから、神にも限界があるだろうと思います。私たちは、神は癌を治すことができると信じられるのに、風邪を引けば祈らないで風邪薬に手を伸ばしますね。いつの間にか、心の中でどれが神にお願いできるものか、自分で対処しなければいけないものか仕分けをしているのです。けれども、真実は、神は風邪を治すことができるのと全く同じように、癌をも治すことができになる方です。

このようにして、自分の問題を正しい位置に置く必要があります。そのためには、問題を自分の目で拡大鏡に反射させるように見るのではなく、神が見ておられるように見る必要があります。そのために、主がどのような方であるかを見上げて、この方をあがめるのです。

### 2 C 事の真実

次にヒゼキヤが行ったのは、事の次第を有体に話したことです。「【主】よ。アッシリヤの王たちが、国々と、その国土とを廃墟としたのは事実です。彼らはその神々を火に投げ込みました。」私たちの信仰は、事実や現実を無視するものではありません。アッシリヤは確かに強国です。数々の国々を倒しました。そして神々を火に投げ込みました。これらのことを無視するのではなく、ヒゼキヤは認めています。

現実を見ていくことは不信仰ではありません。むしろ、現実を見ない信仰は信仰ではありません。それを積極的思考という人間の哲学であると以前、お話したことがありますね。「前向きに生きていこう」と励ます哲学の中には、実は、「後ろ向きの人生」に臭い蓋をしている前提があります。

イエス様には大勢の弟子がいましたが、十字架への道を歩み始められてからは一気に減っていきました。冷や水を浴びせるような、興ざめするような言葉を語られたからです。大勢の群集がイエス様について行った時に、彼らのほうに振り向いて言われました。「わたしのもとに来て、自分の父、母、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。（ルカ 16:26）」と言われたのです。せっかくイエス様に付いて行こうとしているのに、そんな言いぐさないでしょ！という非難の声が聞こえそうです。けれども、イエス様は現実的な話をされました。続けてこう言われています。「塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちにひとりでもあるでしょうか。基礎を築いただけで完成できなかつたら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかった』と言うでしょう。（28-29 節）」費用を計算するのです。そのうえで塔を建てるかどうか決めるのです。ですから実際の今の自分がどうなっているのか見つめなおすのは決して不信仰ではなく、むしろ悔い改めて、真実の信仰に立ち戻ることのできる第一歩であります。

### 3 C 神の救い

そのうえでヒゼキヤは、「彼らの神々は木や石で作られたのだから、アッシリヤは滅ぼすことができた。」と言っています。そして、「私たちの神、【主】よ。どうか今、私たちが彼の手から救ってください。そうすれば、地のすべての王国は、【主】よ、あなただけが神であることを知りましょう。」と祈りました。願いを神が聞いてくださることによって、確かに神が救ってくださる方であると、神に栄光が帰されることを願っています。このような願いは神を喜ばせるし、また神から来た願いです。神が願いを聞いてくださることによって、確かに神がこのように自分の必要を満たしてくださる方なのだ、と言って神をほめたたえることができます。

もし、自分に焦点を合わせているのならば、いつまでも祈りを捧げることはできません。願いを神に持つていくことができません。なぜなら、その願いを立てて、願いが聞かれることで神に栄光が帰されると分かっているからです。自分自身が行ったという功績が認められなくなるからです。自分が神を認めて、神に従わなければいけないということが分かっているのです。

### 3 B 他の拠り所

このように私たちは、自分の力や知恵に限界がきたのであれば、もうこの圧迫から逃れられないと感じるのであれば、その思い煩いを主に知っていただき、願いを立てることができます。ところが、私たちは他のものを拠り所にしていく過ちを犯します。もうこの試練は耐えられないと思って、酒に手を出す人がいるでしょう。あるいは薬物に依存する人もいます。その他の、中毒性のあるものに手を出してしまうのです。それらのものは、解決を与えずにむしろ問題を複雑にしまいます。



もう絶望の淵に立たされた時に、神ではなく、友達のところに行く人が多いでしょう。けれども、友達に限界があることはすぐに分かります。同情はしてくれるでしょう、けれども解決は与えません。そして、絶望してしまうかもしれないませんが、希望を分かち合うことはできません。ダビデは絶望しているときにこう言いました。「神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。御顔の救いを。(詩篇 42:5)」友達に期待したのではなく、神に望みを置きました。

### **3 A 主の回答**

祈りの凄味は、その祈りが聞かれることです。

#### **1 B 受領**

20 節を見ますと、預言者イザヤが人をやって言わせています。「あなたがアッシリヤの王セナケリブについて、わたしが祈ったことを、わたしは聞いた。」主がヒゼキヤの願いを聞かれました。神は祈りを聞かれるのです。「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。(1ヨハネ 5:14)」イエス様が弟子たちにこんなすばらしい約束を与えられました。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります。あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。(ヨハネ 16:23-24)」祈りを聞かれることによって、神は私たちが喜びで満たしたいと願われているのです。ヒゼキヤの内にある、主を慕い求めるその関係の中には、祈りを神が聞かれるという喜びがあります。

#### **2 B 救い**

そして、神はヒゼキヤに、ご自身がセナケリブに手紙への返信をすることを言われました。セナケリブに直接語りかける預言があります。自分ではなく主が自分を守ってくださり、彼を懲らしめてくださるのです。そして実際に、アッシリヤ軍が 18 万 5 千人倒れて、セナケリブ人はアッシリヤの神の宮で礼拝していたところ、息子二人に殺されたのです。神は、自分の神々を誇って、エルサレムの神をそした彼を、神々を礼拝しているところで殺されるようにさせて、いかに彼が話した言葉が虚しかったかを教えられました。

いかがでしょうか？ 祈られたでしょうか、願われたでしょうか？ それとも、今の状況はまだ自分が対処できると思っておられるのでしょうか？ 自分ではどうしようもないと分かっているながら、なおのこと神に祈ることを拒んでいないでしょうか？ 救われるのは神であり、自分ではないのです。自分で救うことをして生きてきた人生だったかもしれない。けれどもそれは、自分の髪の毛を上につ引っ張って、空中に上がろうとしているほど窮屈で、強い葛藤を覚える人生になるのです。ぜひ、自分を引き上げる方を信じてください。必ず引き上げてくださいます。